

No.480

ゆき かべ もよう よ 雪の壁のしま模様を読みとく

春の立山の見どころは室堂平の手前、雪の大谷の巨大な「雪の壁」でしょう。室堂平の4月中旬頃の平均的な積雪は6m程度ですが、雪の吹きだまりとなる雪の大谷では15m～20mにもなります（図1）。

立山黒部アルペンルートの立山高原バスの窓から見える雪の壁は、雪が地層のように積み重なり、連続した縞模様をつくっていることが分かります（図1の右の壁、図2）。下層は前年秋に降って根雪となった層、上層が最近積もった雪の層です。

この縞模様をよく見ると、氷でできた透明感のある層（図2）や、薄い黒色～茶色に色づいた層が細い帯状に入っています（図1の矢印の部分）。氷の層は冬の間に気温が0℃以上になって雪が解けたり雨が降ったりしたことを示します。黒っぽく見える層はススを多く含んだ層で、このススは、季節風によって中国などの都市や工業地帯から運ばれてきたもののようです。薄い茶色の層はアジアの乾燥地帯から運ばれてきた黄砂を含んだ層です。

最近では雪の壁の中のススで汚れた層や黄砂の層の色が薄くなり、雪の壁全体が真っ白に見えるようになってきました。ススの層の色が薄くなっていることは、季節風で運ばれてくる汚れ物質が減ってきていることを示しています。黄砂の層の色が薄くなっているのは、アジアの乾燥地帯の冬から春にかけての気象が変化しているためかもしれません。立山の雪の壁の縞模様の色の変化から地球環境の変化を読み取ることができます。（朴木英治）



図1 雪の大谷の最大積雪付近の雪の壁。←の位置に薄い茶色の黄砂の汚れ層が見える。（2009年4月18日）

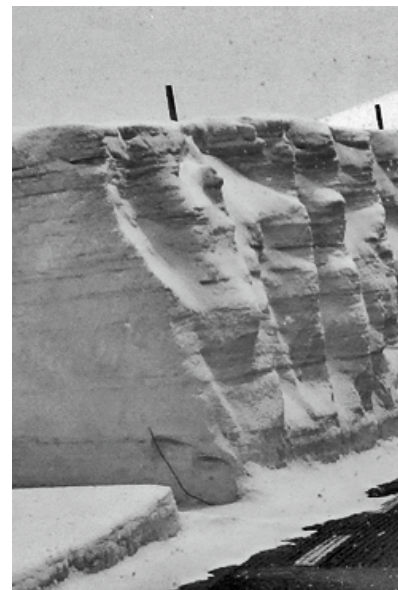


図2 雪の大谷の入り口付近。氷板(黒い横線)が多数入った雪の壁（2013年4月22日）

